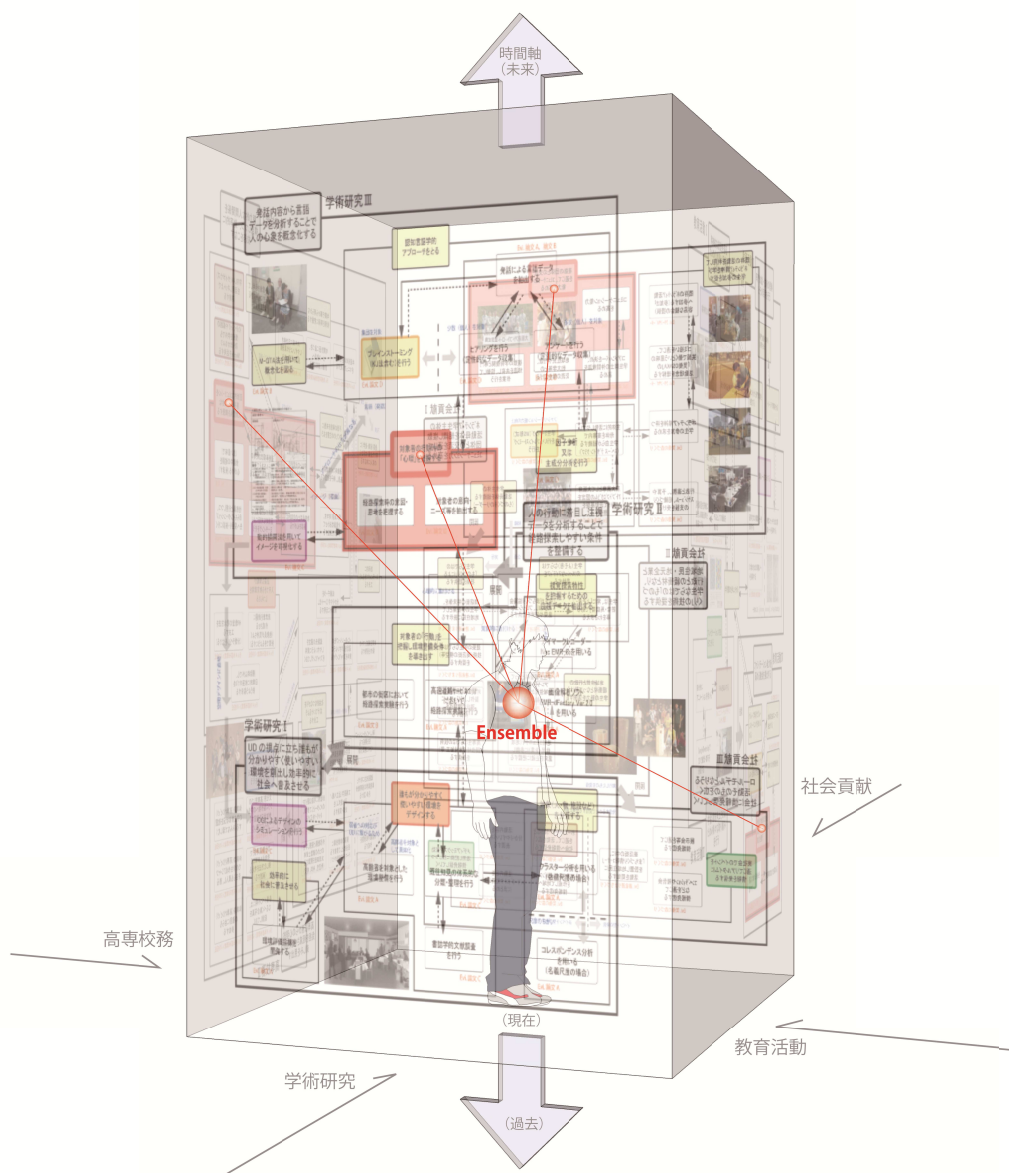


アカデミック・ポートフォリオ



平成 26 年 12 月 27 日作成

大阪府立大学工業高等専門学校
総合工学システム学科都市環境コース
講師 鯉坂誠之

目次

はじめに	1
1. 教育活動	1
1-1. 理念と責任の範囲	1
1-2. 理念を実現するための方略	1
1-3. 教育活動の評価と課題	5
2. 学術研究	6
2-1. 理念と責任の範囲	6
2-2. 研究業績の概要	6
2-3. 理念を実現するための方略	8
2-4. 学術研究の評価と課題	9
3. 高専校務	9
3-1. 理念と責任の範囲	9
3-2. 校務分掌の概要	10
3-3. 理念を実現するための方略	11
3-4. 校務分掌の評価と課題	13
4. 社会貢献	13
4-1. 理念と責任の範囲	13
4-2. 取組みの概要	14
4-3. 理念を実現するための方略	14
4-4. 社会貢献の評価と課題	15
5. 複数の活動との関連と統合	17
5-1. 複数の活動との関連	17
5-2. 複数の活動の統合	18
6. 主たる成果	19
7. 教員としての目標	19
7-1. 短期目標	19
7-2. 長期目標	20
おわりに	20
エビデンス(添付資料)	



各活動の方略を統合する私の核 (コア)

Ensemble

音楽の専門用語で知られるアンサンブル

そこに指揮者はなく 集まった人たちが息を合せ 気持ちを一つにして演奏する

誰もが状況に応じてリーダーシップを発揮しつつ**直接的な交流** (コミュニケーション) を通じ「心」を一つにして**協力**し合い 人が快適に住まうための都市や建築空間の有様を探究する

一つになった瞬間が どっちも楽しい

高専校務

理念 ■ 可能な限りの無駄を排除しつつ
教職員同士の魅力的な人間関係を
構築することで校務に楽しみを見出す

方略 ○ **直接的なコミュニケーションを重視し**
魅力的な人間関係を構築する

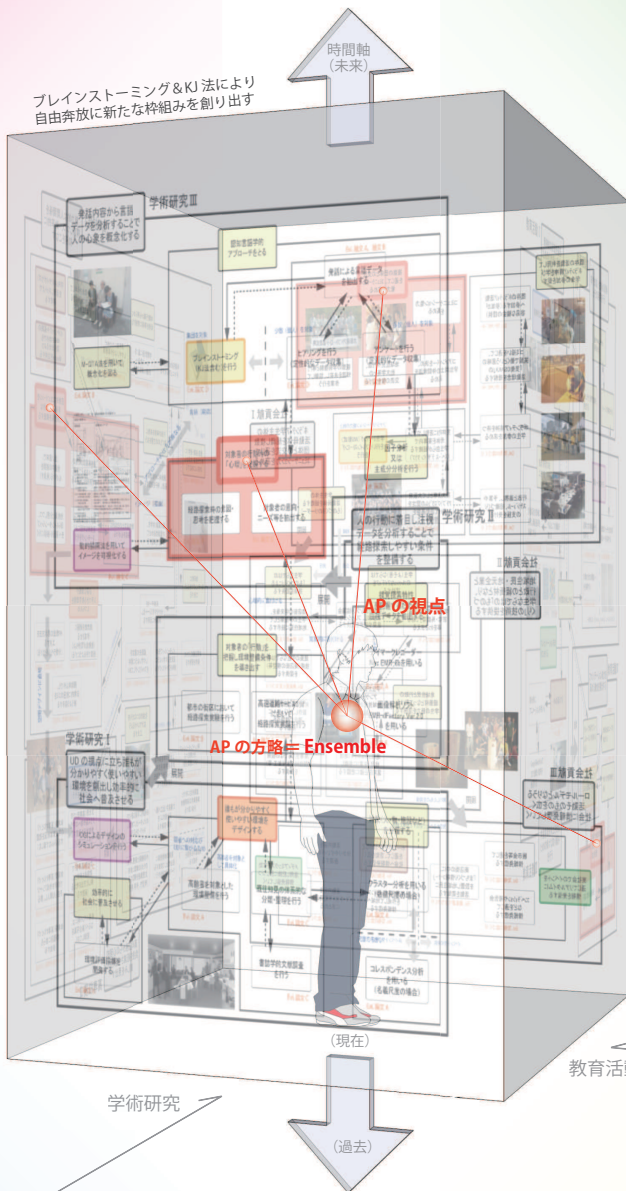
社会貢献

理念 ■ 学生主体の「ものづくり」を通じて
地域コミュニティに参画し
そのロールモデルを広く情報発信する

方略 ○ **複数団体との交流を通じて**
コミュニケーション能力を高める

直

交



心

協

方略 ○ 対象者の行動「**心理**」を把握する

理念 ■ 人の行動と環境との関係性に着目し
人が快適に住まうための都市や建築空間の
有様を探究する



方略 ○ **発言や会話の流れを調整し**
協働を促進する能力を養う

理念 ■ 状況に応じたリーダーシップを発揮
できる人材 (ファシリテーション能力
を有する技術者) の育成

学術研究

教育活動

<凡例>
■: 各活動における理念
○: 方略のうち各活動との関連が最も強いもの (抜粋)

長期
目標

1. 相互作用への期待

自身が育成した人材 (ファシリテーション能力を有する技術者) とともに、人が快適に住まうための都市や建築空間に関する共同研究を実施することが挙げられる。私は複数の活動を統合するコアとして「アンサンブル」を掲げたが、ファシリテーション能力を有する者同士の相互作用はより強い効果を発揮できるものと信じている。

2. 情報の受発信とその継続

潮流を的確に捉え、導かれた知見を広く社会に貢献すべく情報を受発信し、それを継続することが重要である。物事は常に変化する。その時々時代の流れを読むことが求められる。また、情報の受発信は一時的に行うものではなく、継続的に行うことにより活きた情報として社会に貢献できると考えている。

はじめに

アカデミック・ポートフォリオ（以下、AP）の作成目的は、これまでの教育活動・学術研究・高専校務・社会貢献といった複数の活動を振り返り、相互の関係性を捉えるとともに、その核（コア）となる要因を省察することである。また、これにより今後の課題が明らかにされることを期待するものである。

1. 教育活動

1-1. 理念と責任の範囲

(1) 理念：状況に応じたリーダーシップを発揮できる人材の育成

私は2012年4月から大阪府立大学工業高等専門学校（以下、府大高専）に着任し、現在3年が経過しようとしている。また、前歴として約10年間に及ぶ建築設計・まちづくりに関連する実務経験を有している。そこで私は、これらの経験を活かした教育活動を展開することを意識し、実社会において多種多様な専門性を尊重しつつ公平な立場に立ち、『状況に応じたリーダーシップを発揮できる人材（ファシリテーション能力を有する人材）を育成すること』を教育活動の理念とする。以下にその理由を述べる。

私が所属する府大高専では「自律・実践・協調」^[1]が教育理念として示されているが、私の掲げる教育理念はとくに「協調」の中で説明されている「社会や組織の中で、自らの役割や責任を自覚し、異なる考えや立場を持った他者とも対話をもって共通理解をつくり、協力して取り組むことのできる社会性と、リーダーシップをもった人材を養成すること」に挙げられている人材像と合致している。なおリーダーについては、通常、主導者や統率者といった意味で用いられることが多いが、私が関係する建築や都市、まちづくりといった分野では、近年ファシリテーターやコーディネーターといった考え方も示される等、その捉え方は多様化してきている。その中でもファシリテーターに求められる役割は、私が掲げる教育理念に最も近い。そこで本稿では、各々の専門性を尊重しつつ公平な立場に立ち、状況に応じたリーダーシップを発揮できる人材のことを、ファシリテーション能力を有する技術者と位置付け、そうした人材を育成することを教育理念とする次第である。

(2) 担当科目とシラバス（一覧）

表1は、現在までに私が担当した科目の一覧を示す。なお、授業概要が記載されているシラバスをエビデンス資料^[2]として添付する。

1-2. 理念を実現するための方略

本稿では教育活動・学術研究・高専校務・社会貢献といった複数の活動の方略を整理するために、方略を一つずつ付箋ラベルに抽出し、KJ法^[3]を用いてボトムアップ式にモデル化する作業を行う。その際に、従来のKJ法とは異なり、ある一つの方略を実現するための「方法や手段（どのように、How?）」を実線の矢印で示し、その「理由や根拠（なぜ、Why?）」を点線の矢印で示す関係線を描く点を応用している。

図1は方略のモデルを示す。教育活動の理念を実現するための方略をKJ法により整理した結果は、以下の一文にまとめられる。すなわち、「学生にとって心地よい居場所の創出は、専門知識・技術の習得に伴う様々な課題に対し、教員や学生相互の関わりを通して克服していく際の心理的・物理的な拠り所の確保につながる。その上で学習意欲を向上させるための多角的な取組みを行うとともに、ファシリテーション能力を持った人材の育成につなげていくこと」である。

表 1 担当科目一覧

科目名等	事項(日付は西暦)	備考
1. 専門課題学習(C)	2012年4月1日～2013年3月31日	3年通年
2. 総合工学実験実習Ⅲ	2012年4月1日～2013年3月31日	3年通年(分担)
3. 生活環境計画	2012年4月1日～現在	4年通年
4. 環境エネルギー	2012年4月1日～2014年3月31日	4年前期/後期
5. 工学演習Ⅰ	2012年4月1日～2013年9月30日	4年前期
6. 工学演習Ⅱ	2012年10月1日～2014年3月31日	4年後期
7. ユニバーサルデザイン(E)	2012年4月1日～2012年9月31日	5年前期 Eコース
8. ユニバーサルデザイン(A)	2012年4月1日～現在	5年前期 Aコース
9. ユニバーサルデザイン(H)	2012年4月1日～現在	5年前期 Hコース
10. 工学演習Ⅲ	2012年10月1日～2013年3月31日	5年後期
11. 住環境設計演習	2012年10月1日～2014年3月31日	5年後期
12. 総合課題学習(C)	2012年4月1日～現在	4,5年通年
13. 卒業研究	2012年4月1日～現在	5年通年
14. 総合工学システム概論	2013年4月1日～2013年9月30日	1年前期(分担)
15. 建築計画	2013年4月1日～現在	3年通年
16. 建築造形実習	2013年4月1日～現在	3年前期
17. ユニバーサルデザイン(M)	2013年4月1日～2013年9月30日	5年前期 Mコース
18. ユニバーサルデザイン(S)	2014年4月1日～現在	5年前期 Sコース
19. 基礎研究	2014年4月1日～現在	4年通年
20. 工学システム実験実習	2014年4月1日～現在	専攻科1年前期(分担)

以下にその概略を述べる。なお、モデル化においてはボトムアップ式に作業を進めているが、以下の説明においては、論述の便宜上、見出しごとにトップダウン式で述べる。

(1) 精神的な安定を図るための心地よい居場所の創出

着任当初、私の研究室には何もなかった。そこで、まず学生とともに研究室の床を磨くことから始めた。次に研究室のレイアウトを学生に呼びかけ、自由にデザイン^[4]させた上でブレインストーミングを行った。最終的な方針として三つのデザインアイデアを採用した。「作品掲示用コルクボード」「プレゼンテーション用スクリーン」「図書管理システム付き本棚」である。結果的に、学生が自らデザインした研究室は、彼らにとって最も心地よい居場所となったようである。

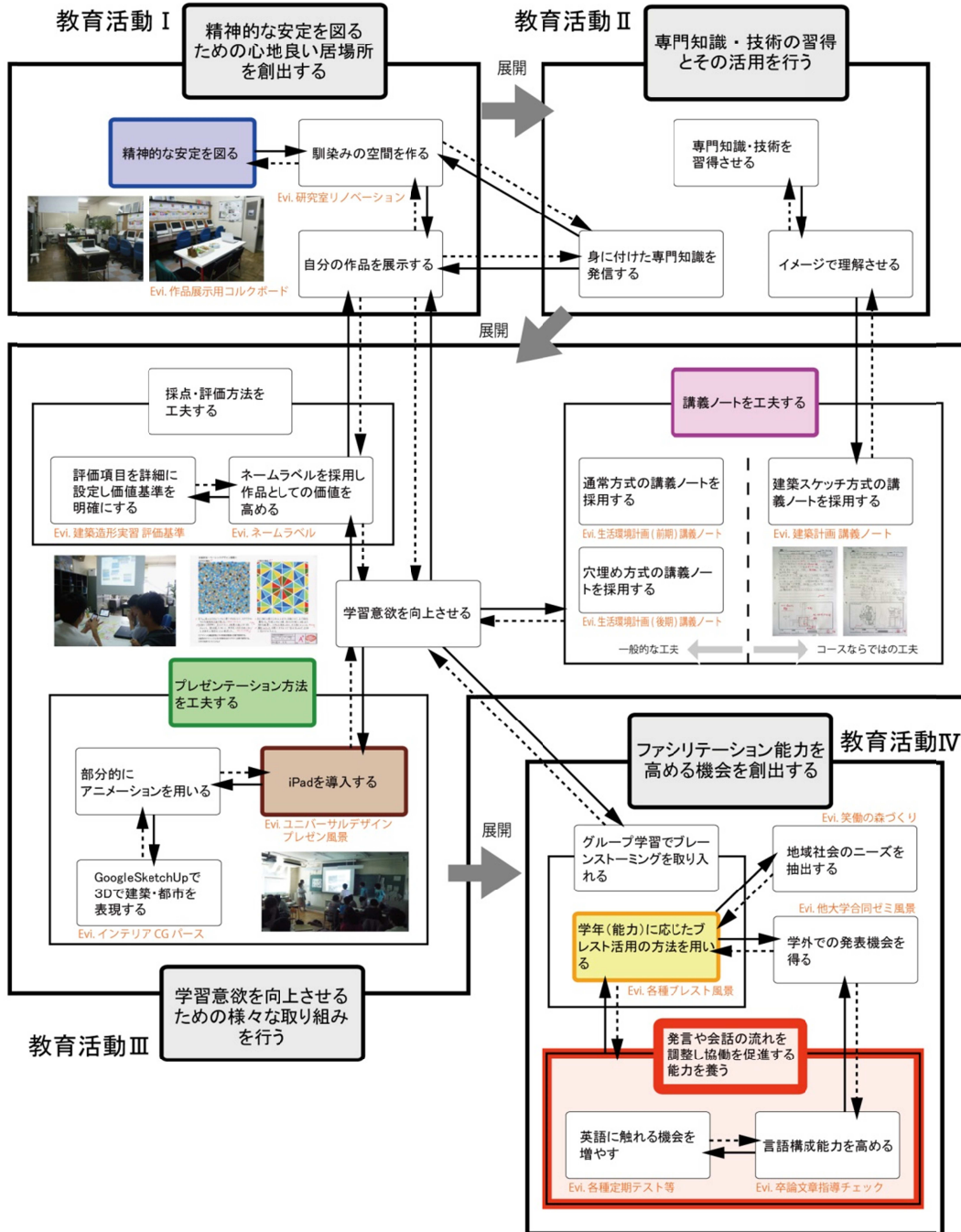
この取組みは、私の学術研究の成果を応用したものである。私は認知症高齢者の施設環境整備に関する研究^[5]を行っているが、その知見の一つに、急激な環境の変化を軽減するためには馴染みの空間を創出することが有効であることが示されている。そして、精神的な安定が図られることによって、他者との交流やイベントへの参加が促される展開へとつながることも示唆されている。これらのことを応用し、高専生活の中に、学生にとって心地よい居場所を創出することが、心理的・物理的な拠り所につながるものと捉えた次第である。

(2) 専門知識・技術の習得とその活用

私の専門は建築計画・デザインであることから、授業においては必然的に図面やパース、建築写真といった手段でイメージを伝える必要がある。そこで授業では講義ノートを工夫し、建築スケッチ方式の講義ノートを採用^[6]している。これは主に、「建築計画」(とくに建築史の範囲)において、毎回の講義ごとに回収・採点・返却(次回講義の開始時)をするための配布プリントのことである。とくに建築史の範囲では、文章的な意味のみならず、歴史的な建築物や都市計画を、ビジュアルなイメージとともに理解させなければならない。そのためには文字情報を「書く」だけでなく、スケッチを「描く」ことが重要である。そこで本講義では、教科書主体の講義を展開しながらも重要なイメージを講義ノートにスケッチする方式を取っている。

教育活動の理念

『状況に応じたリーダーシップを発揮できる人材
(ファシリテーション能力を有する人材) を育成すること』



<凡例>

→ How? どのように?(方法・手段)

← Why? なぜ?(理由・根拠)

Evi. エビデンス資料 青文字: 補足説明

方略(上位概念)

方略(下位概念)

教育活動⇄学術研究

⇄高専校務⇄社会貢献: 方略の核(コア)

教育活動⇄学術研究: 分かりやすい表現(把握)

教育活動⇄高専校務: 安定した生活

教育活動⇄社会貢献: 技術のプレゼンテーション

学術研究⇄高専校務: 分かりやすい環境(しつらえ)

学術研究⇄社会貢献(⇄教育活動): ブレインストーミングの実践

高専校務⇄社会貢献(⇄教育活動): ネット環境の活用

図1 教育活動の理念とそれを実現するための方略

その既往版では、罫線が引かれているだけであるが、私はこれに改良を加え、講義内容が記録できる罫線部分と建築スケッチを描くための空欄部分を分割して 1 枚に収めるデザインとしている。なお、これは私が師事していた工学院大学谷口宗彦教授が約 30 年間取り組んできた方法を参考にしており、一定の効果があることが確認されている。

(3) 学習意欲を向上させるための様々な取組み

各々の専門知識・技術の習得には、学習意欲の向上をいかに行うかといった視点が重要である。以下①～③に述べる。

- ①まず、建築スケッチ方式以外の講義ノートの工夫が挙げられる。一つは「生活環境計画(前期)」の授業で用いている通常方式の講義ノート^[7]である。これは、9mm 間隔の罫線が引かれ、タイトルと日付・出席番号・氏名・評価欄が設けられた A4 用紙で、毎回の講義ごとに回収・採点・返却(次回講義の開始時)をするための配布プリントである。もう一つは穴埋め方式の講義ノート^[8]であり、主に「建築計画」や「生活環境計画(後期)」、「ユニバーサルデザイン」で配布しているプリントである。私はパワーポイントを用いて、イメージをビジュアルに映像として表示する機会が多い。しかしながら、パワーポイントそのものをスライド印刷して配布してしまうと、安心して寝てしまう学生がいる。そこで重要な個所を空欄にしておき、パワーポイントで表示された要点を記入させる工夫を行っている。
- ②次に、採点・評価方法に関する工夫が挙げられる。前述①の「作品掲示用コルクボード」^[9]では、身につけた専門知識・技術を発信することと、学習意欲の向上を意図して学生自身の作品を展示している。具体的には評価項目を明確にし、価値基準を示した上で、評価を行うことである。その価値基準に基づき評価された結果が記入されたネームラベル^[10]を作品に張り付けさせ、作品としての価値を高める効果を与えている。また、「生活環境計画」では、定期テストで出題した小論文課題と同様の質問を、実社会における諸問題を意識させる意図で実施した見学会のレポート課題においても再度出題し、体験前と体験後の意識の変化を比較する試み^[11]を行っている。その際にも、評価基準を事前に示し、その変化を読み取ることが可能な工夫を行っている。
- ③さらに、プレゼンテーション方法の工夫が挙げられる。府大高専は工業系の学校のため、プレゼンテーションの際に目新しい OA 機器・機材を用いると学生の興味を引きやすいことが分かった。そこで、私自身が所有しているプロジェクターと iPad を用いて、プレゼンテーションを行う時間を意図的に捻出^[12]している。パワーポイントにおいても、必要に応じてアニメーションを用いて演習課題の解法手順を提示したり、コンピューターグラフィックスを用いて建築・都市空間を表現する等も行っている。

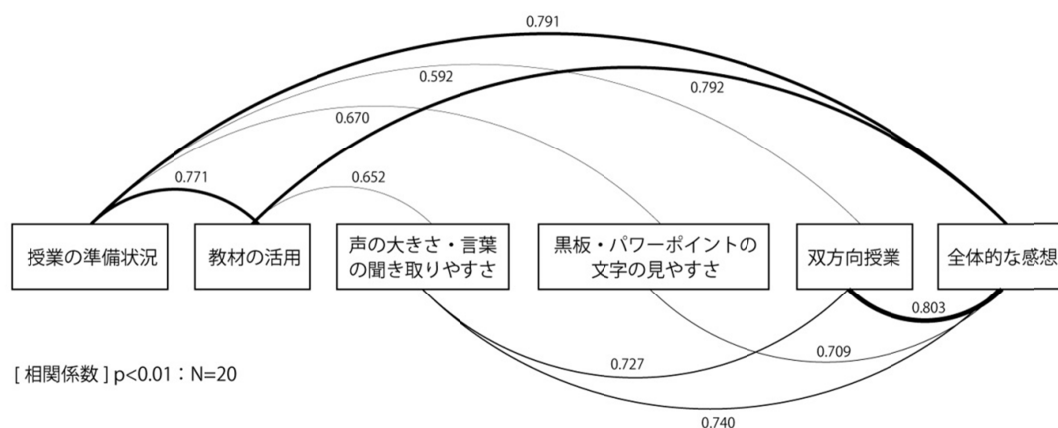
(4) ファシリテーション能力を高める機会の創出

学習意欲を向上させる意図に加えて、ファシリテーション能力を高める機会を創り出す上で有効な手段の一つに、グループ学習でブレインストーミングと KJ 法を取り入れる^[13]ことが挙げられる。ここでいうブレインストーミングとは、集団でアイデアを出し合うことによって相互交錯の連鎖反応や発想の誘発を期待する手法をいう。ブレインストーミングは問題点やアイデアを「発散」する方向にある。一方、出てきた問題点やアイデアをとりまとめるために私が用いている KJ 法は「収束」する方向にある。この「発散・収束」の作業を適切に行うためには、経験豊かな指導者(まさに、ファシリテーター)が必要となるが、私は実務経験におけるまちづくり活動を実践する中で、長年に渡って地域住民からの意見集約の手法として取り扱ってきた経緯がある。そこで、その手法を教育活動にも応用している。おもに「ユニバーサルデザイン」「基礎研究」「卒業研究」で取り扱っている。とくに、「ユニバーサルデザイン」は 6 コースを 2 名の教員で分担しているが、もう 1 名の教員とのファシリテーション技術(この場合は、学生への関わり方、指示の出し方、意見抽出と集約におけるアドバイスの仕方等)を統一する必要があるため、ブレインストーミングと KJ 法を行う際には、こまめに教員間連携を図っている。最終的には、学生自身がファシリテーション能力を身に付けられるようにすることが目標である。

1-3. 教育活動の評価と課題

(1) 公開授業アンケート結果

大阪府大高専では、第三者からの客観的な授業評価を受けるため、「公開授業」が設定されており、公開授業アンケートシート^[14]にその評価内容が記録される。私は定量分析できるようこのシートに5段階評価の欄を加え、私自身の2012年度前期全講義科目に対し、延べ20名の教員から回答を得る調査を行った。図'は相関分析結果を示す。シートに設けられている質問項目は、「授業の準備状況」「教材の活用(教科書・プリント等)」「声の大きさ・言葉の聞き取りやすさ」「黒板・パワーポイントの文字の見やすさ」「双方向授業(対話・様子の把握等)」「全体的な感想(提言等)」といった六つの項目である。私の場合、とくにグループ学習に重点を置き、巡回型で学生と双方向コミュニケーションを図る授業を展開していることから、「授業の準備」と「声の大きさ・言葉の聞き取りやすさ」の向上を図ることが、「双方向授業」につながり、結果的に「全体的な感想」すなわち総合的な評価を向上させる要因となりうるということが明らかとなった。従って、「教材の活用」が非常に重要な位置をしめていることから、その工夫の仕方について詳細に検討することが有効であると言える。



図' 公開授業アンケートシート(2012年度前期実施)の相関分析結果

(2) 教員間連携に基づく授業改善の検討

教育経験年数が短いうちは、教育並びに研究、校務といった面で様々な問題が生じる機会も多い。そこで同じ状況にある若手教員が集まり、『教育経験年数が短いゆえに生じる教育・研究・運営に関する諸問題や各種情報の共有を図るとともに、その解決に向けた報告・連絡・相談の場』を設け、専門・一般の垣根を越えてコミュニケーションを図り、相互連携が取りやすい体制「自主研究会^[15]」を組織している。なお、その会議では、公開授業の結果を踏まえた改善点に関する検討が、「府大高専の教育理念・目標に即して、講義科目における板書・テスト・説明といった基本的取組みに対する工夫を行うとともに、双方向性を作りだすための多面的なアプローチを試みる事が重要である」といったことが確認されている。3年を経過した現在、この活動をどのように継続すべきかを検討することが今後の課題である。

(3) ティーチング・ポートフォリオへの取組み

私自身、ティーチングポートフォリオ(以下、TP)の取組みに積極的に関わろうと思っており、現在までに計3名のメンター(作成者を支援する伴走者)を担当^[16]している。TPのメンターを経験することで、得られるメリットとして「他教員との新たなつながり・より深い交流が生まれる」「他の教育理念に触れることは相互作用として自己省察にもつながる」等が挙げられる。またTPは半年程度の周期で開催されるため、定期的に教育活動を振り返る良い機会となっている。メンターの技術的な側面として、ハイライト作成時にプロトタイプをどのように提示すべきかといった点が今後の課題である。

2. 学術研究

2-1. 理念と責任の範囲

(1) 理念：人の行動と環境の関係性から見た快適な都市・建築空間の創出

私は建築計画学を専門としており、中でも環境行動論^[17]を取り扱っている。環境行動論とは、環境と人間とをそれぞれ独立したものとして両者間の相互作用を扱うのではなく、一つの行動の中の働きと見て、生活の質の改善に応用する学際的研究分野である。そこで私は、『人の行動と環境との関係性に着目し、人が快適に住まうための都市や建築空間の有り様を探求すること』を学術研究の理念とする。

(2) 研究テーマ(一覧)

表2は、現在までに私が携わってきた研究テーマの一覧を示す。なお、関連する研究業績をエビデンス資料^[18]として添付する。

2-2. 研究業績の概要

(1) 主な研究業績

- ① 鯨坂誠之：高齢者の視覚探索特性に基づく高速道路サービスエリアの物理的環境整備に関する研究、工学院大学、博士学位論文、2011年3月
本研究はこれまで研究例の極めて少ない高速道路サービスエリアを建築学的研究の中に位置づけ、アイマークレコーダーを用いて認知科学的に分析を行うことで高齢者の視覚探索特性を明らかにしている。さらにそれに基づく環境整備につながる示唆が示されており、今後この分野で貢献できると考えている。
- ② 赤木徹也、鯨坂誠之：認知言語学的アプローチに基づく都市空間の概念化に関する基礎的研究、日本建築学会、計画系論文集、No. 679、pp2043-2052、2012年9月
本研究は、街路構成の異なる二つの街区を対象とした探索歩行実験を通して、環境から得られる情報を言語データとして抽出し、記憶の再生に基づき意味づけられる都市空間の概念化を試みるものである。環境に対する人間の能動的な活動を人それぞれの内的に形成される「意味」で捉えるために認知言語学的アプローチをとっている点に独創性が認められる。
- ③ 赤木徹也、鯨坂誠之：我国における認知症高齢者の住環境に関する書誌学的研究、研究知見に基づく環境アセスメントと環境デザインへの示唆、日本認知症ケア学会、学会誌、Vol112、No. 2、pp. 340-353、2013年7月
本研究は、現在増えつつある認知症高齢者の住環境に関する研究知見を体系的に整理し、環境評価項目として整理するとともに、具体的な環境整備を行う際の手掛りがCGパースにより表現されており、既往研究よりも踏み込んだ成果が提示されている。

表2 主な研究テーマの一覧

研究テーマ の分類	主な研究テーマ	国内	国外
		査読 有り	アブスト 査読有り
都市環境 に関する研究	<ul style="list-style-type: none"> ・認知言語学的アプローチに基づく都市空間の概念化に関する基礎的研究 ・The psychological structure of “KANDO” that the heart is greatly moved by the space ・The influence of preliminary knowledge to cognize urban environment 	1編	6編
施設環境 に関する研究	<ul style="list-style-type: none"> ・高速道路サービスエリアにおける「休憩の質」に関する環境評価項目の妥当性 ・高齢者の視覚探索特性に基づく高速道路サービスエリアの環境整備に関する研究 ・Legibility Challenges with Wayfinding Behavior of Elderly Persons in Motorway Rest Area 	7編	6編
住環境 に関する研究	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症高齢者の「その人らしさ」に基づく施設個室環境の概念化 ・我国における認知症高齢者の住環境に関する書誌学的研究 ・日常の家庭生活に内在する表象的幸福感に関する概念モデルとその視覚的イメージ 	3編	3編
その他 (学会発表等)	日本建築学会 30編、人間・環境学会 8編、高速道路調査会 2編、 日本老年社会学会 6編、日本認知症ケア学会 1編	査読無し	

『人の行動と環境との関係性に着目し、人が快適に住まうための都市や建築空間の有り様を探究すること』

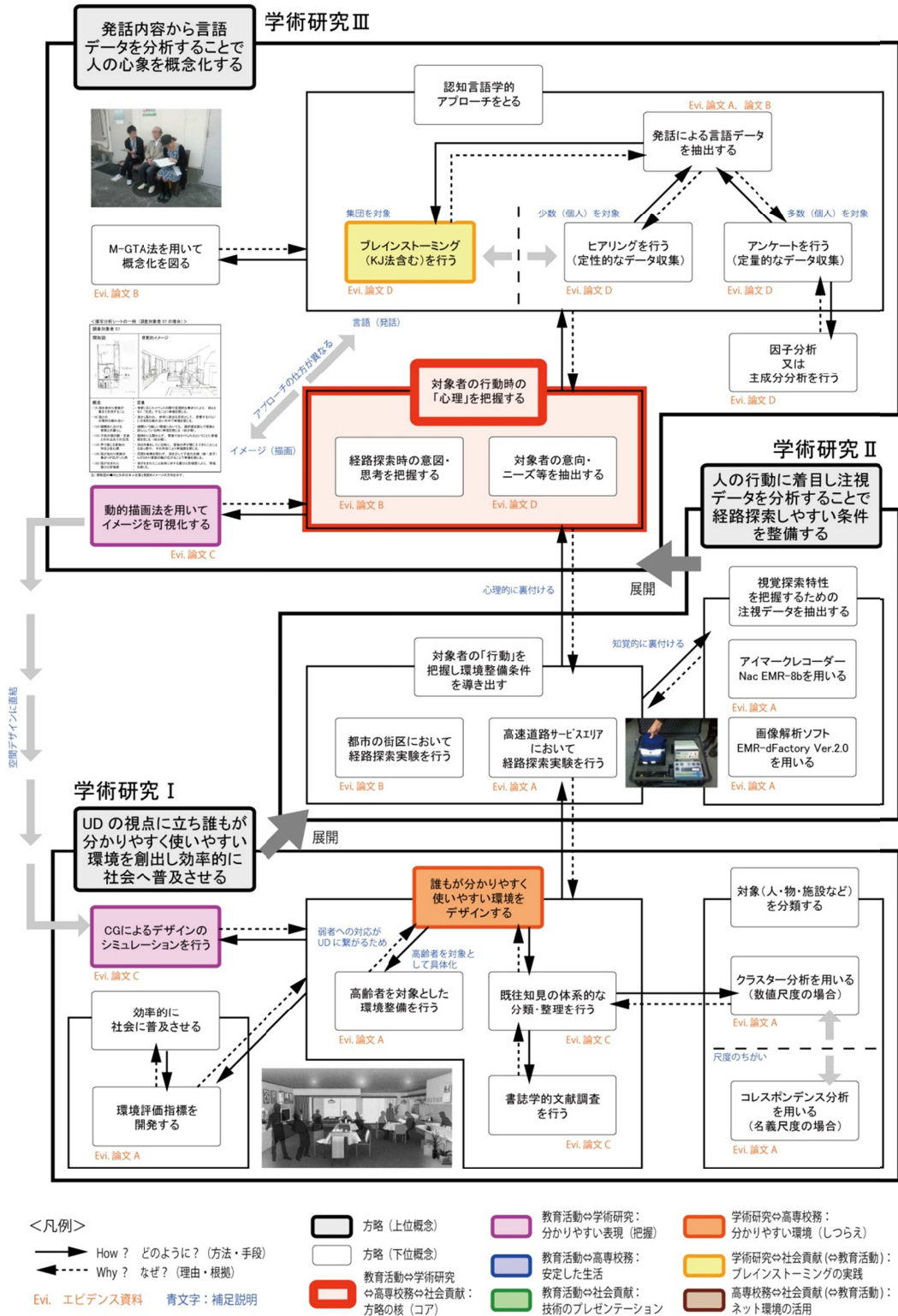


図2 学術研究の理念とそれを実現するための方略

(2) 主な研究資金

- ①大阪府立大学工業高等専門学校 校長奨励研究、2014 年度、「観光客の視覚探索特性に基づく「森林の魅力づくり」に関する評価指標の開発」、研究代表者：鯨坂誠之
- ②高速道路総合技術研究所 共同研究、2013 年度、「高速道路休憩施設の効果的な整備・運用に関する環境評価尺度の開発とその多面的効果」、研究分担者：鯨坂誠之
- ③大阪府立大学工業高等専門学校 校長奨励研究、2013 年度、「笑働の森づくり活動から見た観光資源としての木材利用に関する研究」、研究代表者：鯨坂誠之
- ④高速道路調査会 研究助成、2012 年度、「家族連れの利用者から見た高速道路サービスエリアにおける環境評価尺度の開発」、研究代表者：鯨坂誠之
- ⑤高速道路技術センター 共同研究、2008 年度、「高齢社会に対応する高速道路サービスエリアの環境整備に関する基礎的研究 ―高齢者の視覚探索特性に基づく環境の分かりやすさ―」、研究分担者：鯨坂誠之
- ⑥株式会社づくり三鷹、調査委託、2008 年度、「東京都三鷹市連雀通り商店街地区調査(2008 年度意向調査)」、研究分担者：鯨坂誠之
- ⑦株式会社づくり三鷹、調査委託、2007 年度、「東京都三鷹市連雀通り商店街地区調査(2007 年度意向調査)」、研究分担者：鯨坂誠之
- ⑧東京都小規模事業経営支援事業、商工会等広域連携等地域振興対策事業補助金、調査委託、2001 年度、「東京都清瀬市清瀬駅南口周辺活性化と賑わいづくりアンケート調査」、研究分担者：鯨坂誠之

2-3. 理念を実現するための方略

図 2 は方略のモデルを示す。学術研究の理念を実現するための方略を KJ 法により整理した結果は、以下の一文にまとめられる。すなわち、「ユニバーサルデザインの視点に立ち、誰もが分かりやすく使いやすい環境を創出し効率的に社会へ普及させるため、人の視覚探索特性に着目するとともに言語データを分析することにより心象を概念化した上で、その整備条件を体系的に提示すること」である。以下にその概略を述べる。

(1) 誰もが分かりやすく使いやすい環境の創出と社会への普及

私の学術研究の理念の根底には、ユニバーサルデザインの視点がある。ユニバーサルデザインとは、1985 年にロナルド・メイスによって提唱された概念で「特別に改造したり特化された設計の義務を負うことなく、可能な限り広範なすべての人々にとって使いやすい製品や環境のデザイン」を意味する。私はこの視点に立ち、誰もが分かりやすく使いやすい環境を創出したいと考えている。この場合、調査対象者をすべての人々とするのは困難なため、とくに加齢により判断力や身体的機能が低下してきた高齢者や、移動上の制約を受けている車椅子利用者といった方々に対象を絞ることが多い。そこには彼らの環境を整備することが、より健常である者にとっての環境整備にもつながるといった意図が含まれている。

その際、調査対象者や対象施設がどのような分類の中に位置付けられるのかを明確に示してから研究に臨んでいる。また、私の場合、既往の研究知見を体系的に分類・整理し新たな知見の発見につなげるために、書誌学的な文献調査をかなり綿密に行っている。近年では論文検索サイトの普及により容易に論文を検索することが可能となっているが、キーワードの検索のみならず、本文に記載されている内容を意味解釈した上で知見を抽出するよう心掛けている。

さらに踏み込んで、導かれた知見に基づき環境のデザインの示唆（空間提案）を行う際には、可能な限り CG パースや模型等でシミュレーションを行い、ビジュアルに表現するよう心掛けている。これは、人が思い浮かべるイメージはそれぞれに異なるため、具体的なカタチに示すことが共通認識を得る上で、最も有効であると考えているためである。こうして得られた知見や示唆を評価指標として体系的にまとめることで、広く社会に普及させていく方略をとっている。

(2) 人の行動と注視データに基づく経路探索しやすい条件の整備

私が、建築計画学の中でも環境行動論に着目しているのは、生活の質の改善を図るため、すなわち「人が快適に住まうための都市や建築空間の有り様を探究するため」である。快適に住まうためには、様々な要因が考えられるが、その一つに環境を分かりやすく整備するという視点が挙げられる。その環境の分かりやすさは「経路探索のしやすさ」で捉えられることがある。経路探索とは『広義の経路選択一般に含まれるものであると言えるが、特に環境の情報が不足している事態、あるいは行動主体の側からいえば、学習水準が低い場合における経路の「選択」を指す』と定義^[17]されている。私が行っている経路探索研究とは、これを応用し、ある経路（出発地点から到達地点までの間）で、人が何を手掛りとして空間を認知しているかを明らかにすることで、環境を分かりやすくしていこうとするものである。調査対象地は現在のところ他の交通機関の旅客施設（駅舎、空港ターミナルビル等）に比べて研究が遅れている高速道路サービスエリアを取り扱っているが、建築空間だけでなく、都市の街区も取り扱っている。

また、人が何を手掛りとしているか、といったことを把握する手段の一つとして、アイマークレコーダー^[19]（視知覚に着目）を用いている。アイマークレコーダーは、角膜反射により眼球運動を測定する装置であり、眼に照射する赤外線の反射光の動きをアイマークとして記録できる。これにより、人が何をどの程度の時間、またはどの程度の回数、「注視」していたかを注視データとして抽出することができる。この場合、意識的か無意識的に限らず、客観的に注視していたか否かを明らかに出来る点が面白い。

(3) 発話内容に基づく言語データから見た人の心象の概念化

アイマークレコーダーは視知覚により客観的なデータを抽出できるのに対して、もう一つ私が重視しているのは、人々の行動時の「心理」を把握することである。ある出発地点から到達地点までの間で、人がどのようなことを思考し意図しながら移動しているのか、到達地点に至る際に手掛りとなったものは何か、等を把握する。そこでは主観的なデータの抽出が求められる。人の心理を把握するための手法は様々な考えられるが、私はヒアリングやアンケートによって得られる言語データに着目している。言語データの意味解釈を行い、その人の心の中にある方略を「概念」として抽出し、その概念をモデル化することで、概念相互の関係性を読み解くことが容易になる。注意しなければならないのは、主観的なデータを取り扱うため、統計的な発想から一旦頭を切り替えて、人の心理を深く掘り下げていこうとする鋭い洞察力が求められる点である。

最終的には、主観的な概念を客観的な注視データで裏付けることにより、分かりやすい環境を整備していく上での根拠を明確に打ち出すことが可能となる。

2-4. 学術研究の評価と課題

鯨坂誠之, 赤木徹也: 環境の分かりやすさに基づく高速道路サービスエリアの類型化、日本建築学会、技術報告集 Vol. 16, NO. 33, pp. 639-644 【工学院大学優秀論文賞】

その他に、現時点までの論文数(査読有)は 11 編、国際会議論文(アブスト査読有)は 15 編、学会大会論文等については日本建築学会 30 編、人間・環境学会 8 編、高速道路調査会 2 編、日本老年社会科学会 6 編、日本認知症ケア学会 1 編である。査読論文の編数をコンスタントに確保していくことが今後の課題である。

3. 高専校務

3-1. 理念と責任の範囲

(1) 理念：「魅力的な人間関係・校務の効率化・心理的負担の軽減」の 3 本柱

一般的に、高専教員は大学教員に比べ、管理・運営に関わる負担が大きいことで知られている。中には事務方の職員が行うべき内容をも教員がこなさなければならない場合もある。結果的に、事務処理能力の高低が教育活動の良否に影響を及ぼしかねない状況である。そこで私は、『校務を楽しく、且つ効率的に行うために可能な限りの無駄を排除しつつ、教職員同士の魅力的な人間関係を構築すること』を高専校務の理念とする。

(2)校務分掌(一覧)

表3は、現在までに私が担当した校務分掌の一覧を示す。なお、当該校務分掌の規定が記載されている書類をエビデンス資料^[20]として添付する。

3-2. 校務分掌の概要

(1)4年都市環境コースの担任

高専における担任制度は、大学の担任制度とは異なりその責任の範囲は多岐に及ぶ。4年生の担任で最も重要なものは、夏期に行われるインターンシップと、年度末に行われる進路指導(就職・進学)等における依頼先との調整業務である。都市環境コースではここ数年、インターンシップも進路も「民間企業」「公務員」「進学」の3パターンに希望が大別される傾向^[21]にある。

また、インターンシップ・進路のいずれにおいても学生との個人面談(進路については保護者面談含む)により希望先を確認した上で、依頼先となる企業、官公庁、大学等との調整を担当が行うことになっている。依頼先決定後の申請手続きは別組織(研究主事室)が行うが、エントリーシートの作成や履歴書・自己紹介書のチェック、面接練習の付添い等は担任が行っている。

その他にも、コース懇談会や体験入学、オープンキャンパスといった対外的なイベントの際には、担任として学年の紹介を行うことが求められる。こうしたイベントは週末に開催されることが多く、心身ともに疲弊しきってしまう教員の現状がそこにはある。なお、こうした担任制度に加えて、大学等と同様に研究室が存在しているため、別途、卒業研究のゼミ生も抱えていることを付け加えておく。

表3 主な校務分掌の一覧

校務分掌	主な内容	担当年度
4年都市環境コース 担任	学級の運営並びに学生の学習指導及び生活指導	2014年度
教務・時間割編成委員会	時間割編成、定期試験日程調査、教科書選定依頼等	2012年度・ 2013年度
英語教育連携ネットワーク	学生の英語力向上と英語学習に対する動機づけ、学校要覧英語版の作成	2012年度～ 2014年度
学生相談室・ハラスメント委員	学習上及び生活上又は心身上の問題をもつ学生に対し適切な措置を講じて健全な学生生活を送ることができるよう支援すること	2014年度

注) 2012年度は4年環境都市システムコースの副担任を、2013年度は5年環境都市システムコースの副担任を担当している。

(2)教務・時間割編成委員会

本委員会は、主に定期試験ごとの各コース教員の試験日程・時間の調整と、年度末付近で組まれる次年度の時間割編成が主な業務となる。とくに時間割編成が作業的には難しいと言えるが、本校教員によって独自に開発された「時間割編成ソフト^[22]」があるため、かなり作業効率化が図られている。むしろ、その時間割編成ソフトを上手く使いこなせるよう、ソフトの操作を習熟することが委員には求められていると言える。

(3)英語教育連携ネットワーク

本委員会は、国際化を意図して日本語版の学生要覧を英語化^[23]することを主な活動内容としている。英語科目担当教員と連携しながら、各コースから配属された教員が各自の担当箇所を英語化し、会議の際に確認する流れが組まれている。会議以外のタイミングでは、本校の学内LAN(サイボウズ)を活用し検討が進められることが多い。

(4) 学生相談室・ハラスメント委員会

高専では、精神的に不安定な学生が各学年で数名程度いる。また、授業科目は単位制のため進級が困難な学生もおり、原級留置または退学の可能性がある場合には保護者への対応が必要になってくる。本委員会は各学年から1名ずつの教員と保健室職員、学生主事室の教員が集まり、そうした学生に関する報告・連絡・相談を行う場である。月に1回のミーティングではあるが、相談内容が複雑な場合が多いため、規定の時間内で終了することが比較的難しい。

3-3. 理念を実現するための方略

図3は方略のモデルを示す。高専校務の理念を実現するための方略をKJ法により整理した結果は、以下の一文にまとめられる。すなわち、「直接的なコミュニケーションを重視し、教職員同士の魅力的な人間関係を構築しつつ、効率的に作業やミーティングを行うために工夫する。また、教育する側の心理的負担を軽減するため自ら校務の中に楽しみを見出し、実践すること」である。以下にその概略を述べる。

(1) 魅力的な人間関係の構築と校務の効率化

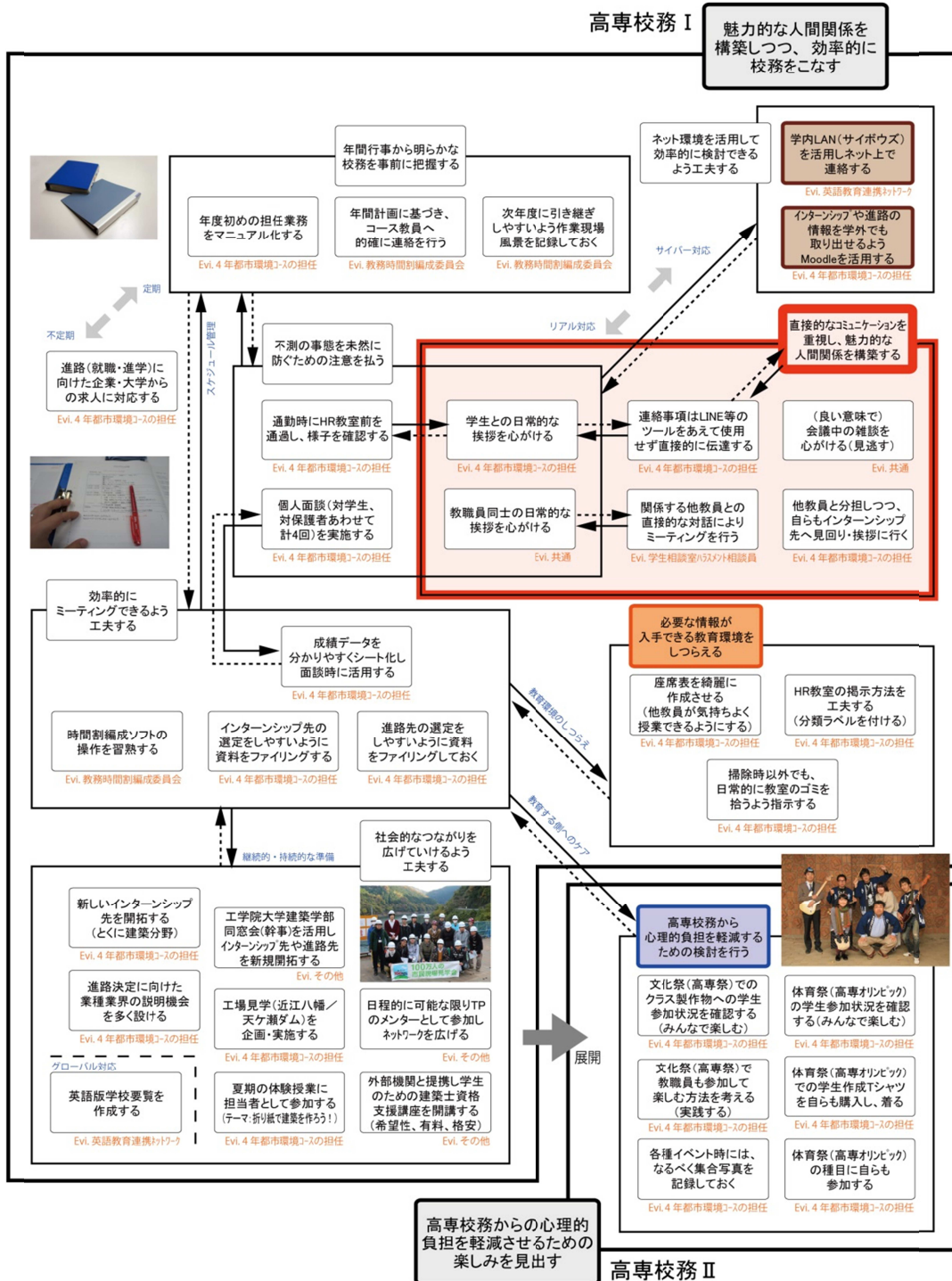
私は直接的なコミュニケーションを重視している。具体的には学生・教職員問わず、日常的な挨拶を心がけることから始まる。とくにコミュニケーションを深めるためには直接、会って話をすることが効果的であり、情報を伝達する上では電子メールやLINEを活用することが効果的である。高専は大学等とは異なり、ホームルームの学生とはほぼ毎日顔を合わせる関係にあるため、タイムラグが生じることが致命的となるような場合以外は、直接的なコミュニケーションを心がけている。また、学内外からアクセス可能なMoodleを活用しているが、連絡済みの情報をいつでもどこからでも取り出せる状況にしておくことが、ホームルームを運営していく上では有効である。必要な情報入手できる環境を空間的にしつらえるという点でいうと、その他にホームルームの掲示板の掲示位置を指定しておく(ラベル化しておく)工夫等も行っている。

教職員の連携についても、同様に直接的なコミュニケーションの重要性を痛感している。高専校務が多すぎるため、教職員同士の場合には学内LAN(サイボウズ)を活用せざるを得ないが、直接会って話せば数秒で終わる要件であっても、テキスト情報でやり取りする場合には、形式的な文章で飾らなければならない、無駄な労力がかかってしまう。また、会って話せば伝わる感情的な想いが、テキスト情報の場合にはそぎ落とされてしまうため、機会的なやりとりになってしまい人間関係が希薄化していく事も懸念される。

その大きな要因は、高専校務における事務作業を教員に多く割り当てすぎていることにある。一例を挙げると、高専では定期試験後に保護者へ成績票を郵送している。その際、成績票に同封したい担任からの配布資料がある場合、全学生への封入作業を担当が行わなければならない。私は資料作成は担任、封入作業は事務局に分業すべきであると考えている。しかしながら、このような作業が「あいまい」なままに、教員にお願いされており、結果的に教員の負担は日増しに増えている状況にある。こうした高専校務における事務活動と教育活動(教員がすべき活動)をあいまいにせず、線引きを明確にすることが、府大高専全体の課題と言えよう。一方、現状において私自身が高専校務の効率化を図ることも重要である。年間行事予定表からあらかじめ予定されている校務は把握できるが、逆に予定表には記載されていない細かな情報が重要であることも多いため、これを整理することから始めている。そのために、なるべく記録写真を残す方法をとっている。文章的な資料だけでなく、その場の状況を写真に収めておくことで私自身はもちろんのこと、次に類似した校務を行う可能性のある第三者的が見ても分かりやすい資料として残せる。また、不測の事態を可能な限り未然に防ぐ努力も必要である。「起こってから考えれば良い」という場当たりの発想ではなく、「段取り八分、仕事は二分」の発想が、結果的には校務の無駄を省くことにつながると考えている。そのために、インターンシップ先や就職・進学先の資料のファイリングや成績データを分かりやすくシート化し保護者面談で活用する、等の作業が重要である。一見すると面倒で手間のかかるものではあるが、トラブルを未然に防ぐ上で重要な作業だと考えている。

高専校務の理念

『校務を楽しく、且つ効率的に行うために可能な限りの無駄を排除しつつ、教職員同士の魅力的な人間関係を構築すること』



<凡例>

→ How? どのように? (方法・手段)
← Why? なぜ? (理由・根拠)

Evi. エビデンス資料 青文字: 補足説明

- 方略 (上位概念)
- 方略 (下位概念)
- 教育活動や学術研究
- 高専校務や社会貢献: 方略の核 (コア)

- 教育活動や学術研究: 分かりやすい表現 (把握)
- 教育活動や高専校務: 安定した生活
- 教育活動や社会貢献: 技術のプレゼンテーション

- 学術研究や高専校務: 分かりやすい環境 (しつらえ)
- 学術研究や社会貢献(教育活動): プレインストーミングの実践
- 高専校務や社会貢献(教育活動): ネット環境の活用

図3 高専校務の理念とそれを実現するための方略

(2)校務からの心理的負担を軽減させる楽しみ方

私にとって高専校務とは「辛さに耐えて仕事をする事」である。とても辛い。楽しくない。こればかり続けていたら精神的にも肉体的にも続かない。疲れてしまう。そこで、少しでも心理的な負担を軽減させるため、高専校務の中に楽しみを見出すよう心掛けている。例えば、体育祭（高専オリンピック）や、文化祭（高専祭）への学生参加を促しつつ、みんなで楽しめるようイベント時に作成されるクラスTシャツ^[24]を私自身も購入し一緒になって着ている。また、高専オリンピックでは教職員参加種目（バドミントン^[25]等）へ積極的に参加するとともに、高専祭では教職員バンド^[26]を結成しており、やや内輪ウケではあるが学生と教員が一体となって楽しめるよう心掛けている。

3-4. 校務分掌の評価と課題

(1)学生からの「寄せ書き」

公的な文書とは言い難いが、教員が教員であることに誇りを感じる評価指標の一つとして学生から貰う「寄せ書き^[27]」を挙げたい。この寄せ書きは、必ずしも貰えるものではなく、また貰った場合にも記載されている内容がありきたりな定型文であったりする可能性もありうる。従って、心のこもった寄せ書きを貰ったときに、教員冥利を感じると言える。これは公的な評価よりも良い意味で破壊力がある。

(2)校長顕彰

公的な評価としては、府大高専の校長顕彰（実施要領第二条第(5)項「英語教育連携ネットワーク委員会における取組み」、2013年3月）の表彰が挙げられる。

4. 社会貢献

4-1. 理念と責任の範囲

(1)理念：学生主体の「ものづくり」を通じた地域コミュニティへの参画と情報発信

私は前歴において、まちづくり活動を継続的に行ってきた。その際、従来は行政主導で行われてきたまちづくりが、地域住民主体へと変化しつつあることを実感してきた。そして、今も「まちづくり」は「地域住民が主体」であるという考えを持っている。そのまちづくりで学術機関が地域コミュニティに参画する上では、学生が主体となって活動することが非常に効果的であった。とくに建築や都市を扱う学生の「ものづくり」に関する知識や技術は、交流を深める上での強力なツールとなりうる。そこで私は、『学生が主体となった「ものづくり」を通じて地域コミュニティに参画するとともに、その活動(ロールモデル)を社会に広く情報発信すること』を社会貢献の理念とする。

表4 主な社会貢献活動の一覧

社会貢献の名称	主な内容	担当年度
笑働の森づくり (大阪府 鳳土木事務所)	和泉市横尾山の森林再生・保全に伴う間伐材の有効利用 (大阪府アドプト・プログラムの認定)	2012年度～ 2014年度
笑働 OSAKA クリーンサポーター (大阪府都市整備部)	ゴミ清掃のボランティア活動	2012年度・ 2013年度
連雀通りまちづくり協議会 (東京都三鷹市)	三鷹市連雀通り商店街の活性化と周辺まちづくり	2004年度～ 2010年度
清瀬商工会まちづくり協議会 (東京都清瀬市)	清瀬駅南口ふれあい通り商店街の活性化と賑わいづくり	2001年度～ 2002年度
建築士資格支援アカデミック講座 (日建学院)	二級建築士講座 (4年生対象プレアカデミック講座、5年生対象アカデミック講座)	2012年度～ 2014年度
工学院大学建築学部同窓会 (工学院大学、校友会)	同窓会誌 NICHE の出版、同窓会幹事	2001年度～ 2012年度

(2) 取組みテーマ(一覧)

表4は、現在までに私が担当した社会貢献の一覧を示す。なお、当該活動の委託契約書等はエビデンス資料^[28]として添付する。

4-2. 取組みの概要

(1) 笑働 OSAKA(クリーンサポーター、笑働の森づくり)

大阪府では、都市整備部による笑働 OSAKA^[29]と呼ばれるまちづくり活動が展開されている。その活動では産公民学の連携をベースに「笑」顔で協「働」することが謳われており、複数の活動が同時展開されている。私は既存の活動「クリーンサポーター^[30]」へ研究室ゼミ生とともに参画し、ゴミ拾いの清掃を通じて笑働 OSAKA の理念を理解させ、学生にボランティア精神を学ばせる機会を得た。

また、笑働 OSAKA の重要な活動の一つに位置付けられる「笑働の森づくり^[31]」では、大阪府和泉市槇尾川流域において住民参加型のワークショップが進められている。府大高専は他の学術機関(大阪産業大学、桃山学院大学、大阪府立大学等)とともに、「ものづくり」の立場からその中心的役割を担っている。

主に地球環境保護の観点から森林の保全・再生が目指されており、間伐材を活用して地域資源の有効活用とまちづくりの観点からのまちの活性化と賑わいづくりが求められている。そこで間伐材を活用した人道橋やガードレールの木質化、チップ舗装といった土木的スケールの作業から、木製のお弁当箱や箸、会員証等の小物の製作までを行っている。また、間伐材を活用した木製展示ブースを製作し、それを移動展示して、対象地域のみならず、和泉市駅前プラザや大阪駅前のグランフロント大阪、心斎橋 SMBC の展示コーナー、水都 OSAKA フェス、寝屋川エコフェスタ等でお弁当箱づくりや箸づくり等のワークショップも行い、広く一般の市民への周知活動等につなげている。

(2) 連雀通りまちづくり協議会

前歴において、行ってきたまちづくり活動の一つに、連雀通りまちづくり協議会^[32]での活動が挙げられる。対象地域は、東京都三鷹市にある連雀通り商店街であり、都市計画道路によって商店街が分断されてしまい店舗の建て替えを余儀なくされているエリアである。そこでは道路拡幅事業後の商店街の将来像が求められていた。そこで、工学院大学建築学部の学生が参画し、地域住民とともにまちづくりのビジョンを具体的に検討した。そして、商店街の空き店舗を有効活用し、「まちづくり情報コーナー」を設置し、商店街の現状・将来のイメージ模型や活動軌跡をパネル化して展示する等を行った。最終的に要望を市長に提言し、まちづくりの方向性を提示している。この活動は私自身が、学生主体のものづくりを考える契機となった最も重要な活動と位置付けられる。

(3) その他(資格支援講座、工学院大学建築学部同窓会)

府大高専の都市環境コースの授業科目は、基本的に土木系分野の占める割合が高く、卒業後の進路も比較的土木系分野が多い。しかしながら、多くの学生は建築系分野に大きな関心を示している。しかしながら進路先が期待できないことから、建築系分野を選べない状況にある。そこで、その状況を改善するための対策の一つとして、私が窓口となり、外部機関の建築士資格会社(日建学院)と本校で協定書を交わし、希望者に対して建築士講座を格安で受講できる仕組み^[33]を導入した。その上で日建学院の就活部門とも連携し、建築系分野の就職先の紹介も行えるようコーディネート^[34]を行った。

また、私が幹事をしていた工学院大学建築学部同窓会^[35]のネットワークを活用することで、建築系分野のインターンシップ先や進路先の確保に努めている。

4-3. 理念を実現するための方略

図4は方略のモデルを示す。社会貢献の理念を実現するための方略をKJ法により整理した結果は、以下の一文にまとめられる。すなわち、「ボランティア精神を持った学生主体の活動母体を組織し、複数の団体との交流を通じてコミュニケーション能力を高

める。学生は、地域住民や地元企業、行政との緩衝材になりうるため、その強みを活かしつつ、学生ならではの『ものづくり』の技術を提供し、活動そのものを広く社会に情報発信していくこと」である。以下にその概略を述べる。

(1) 学生活動の組織化と複数団体との交流を通じたコミュニケーション能力の向上

ボランティア活動（まちづくり活動に関連するもの）に参加する学生には、一般的に知られているボランティア精神（自発性、無償性、利他性、先駆性）を求めている。

本来、そうした意識をもともと持っている学生が自然に集まってくることが理想であるが、現実にはなかなか難しい。一方で、とくにそのような意識はなかったものの、参加してみたことによりボランティア精神を理解する学生もいる。私が期待しているのはその層である。そのために、既存のボランティア活動（笑働 OSAKA クリーンサポーター）を活用し、「まずは参加してみる」ことを促している。やってみて自分には向かないと思えばそれ以上の参加は期待しない。逆に、その活動に何かしら価値を見出し、主体的に活動したくなる学生には、継続的に活動できる場を提供したいと考えていたところ、2014年度に府大高専内にクラブ団体「Space Design Club^[36]」が創設されたため、私はその顧問となった。Space Design Clubは現在24名（専攻科1名、本科5年生8名、4年生5名、3年生5名）が所属しており、主に「笑働の森づくり」に参加している。地域住民や他大学学生らとのワークショップが中心になるため、そこで活用できる技術としてブレインストーミングとKJ法を私が事前にレクチャーしている。

(2) 学生ならではの「ものづくり」に関する知識・技術の提供

学術機関が地域コミュニティに参画する場合、まちづくりに関わる作法として学生は常に「よそ者、若者、馬鹿者」であることを意識する必要がある。たまたまその地域に住んでいる者は別として、基本的に学生は部外者である。よそ者はよそ者らしく謙虚に振る舞わなければならない。しかし、学生は若い。とくに近年、高齢化が進み地元若手が少ない多くの都市において、まちづくりに若い学生が参画することは、それだけでも意義がある。何をやるにしても機動力は必要となるが、学生にはそれがある。そして、地域住民や地元企業の方々が盲目的になり方向性が凝り固まっていたり、ワンパターンな方法論になっている場合に、良い意味で馬鹿なアイデア（フレッシュな発想）を提供できる存在でもある。また、産公民学でまちづくりを行う際、行政が地域住民にアドバイスをしても警戒され聞き入れてもらえない事があるが、同じことを学生が話した場合には比較的容易に意見を受け入れてもらえることも多い。学生が緩衝材となり、物事がスムーズに進むことが有りうる。したがって、アンケートやヒアリング等が行いやすく、地域のニーズも把握しやすい。そして、最も重要なことは、高専の学生は「ものづくり」の知識・技術を提供できることである。口を動かすだけでなく、実際に手を動かしてものを作ってみせることで、徐々に信頼を勝ち得ていくといったことが可能となる。

(3) ロールモデルとなりうる活動そのものの情報発信

現在、私は笑働の森づくり活動をまちづくり事例の一つのロールモデルとして、情報発信している。手段は二通りあり、一つは実社会のイベントを通じてリアルタイムに情報発信するパターン（イベント型）である。この場合、例えば展示会やコンペティション、報告会等を利用している。もう一つは、複数のメディアを織り交ぜながら多面的に情報発信するパターン（非イベント型）である。この場合、記録に残すことを前提に、雑誌や新聞、ホームページやSNSの活用、写真を多くしたパンフレットの作成、動画ムービーの配信等を利用している。いずれの場合も、情報を発信した後に、その反響を真摯に受け止め、新たな展開へと活用することが重要である。

4-4. 社会貢献の評価と課題

(1) 大阪府アドプト・プログラムの認定

当該プログラムは、大阪府が管理する道路や河川等の一定区間において、地元自治会や団体が、自主的に清掃や緑化等のボランティア活動を実施する場合に大阪府と関係市

社会貢献の理念

『学生が主体となった「ものづくり」を通じて地域コミュニティに参画するとともに、その活動(ロールモデル)を社会に広く情報発信すること』

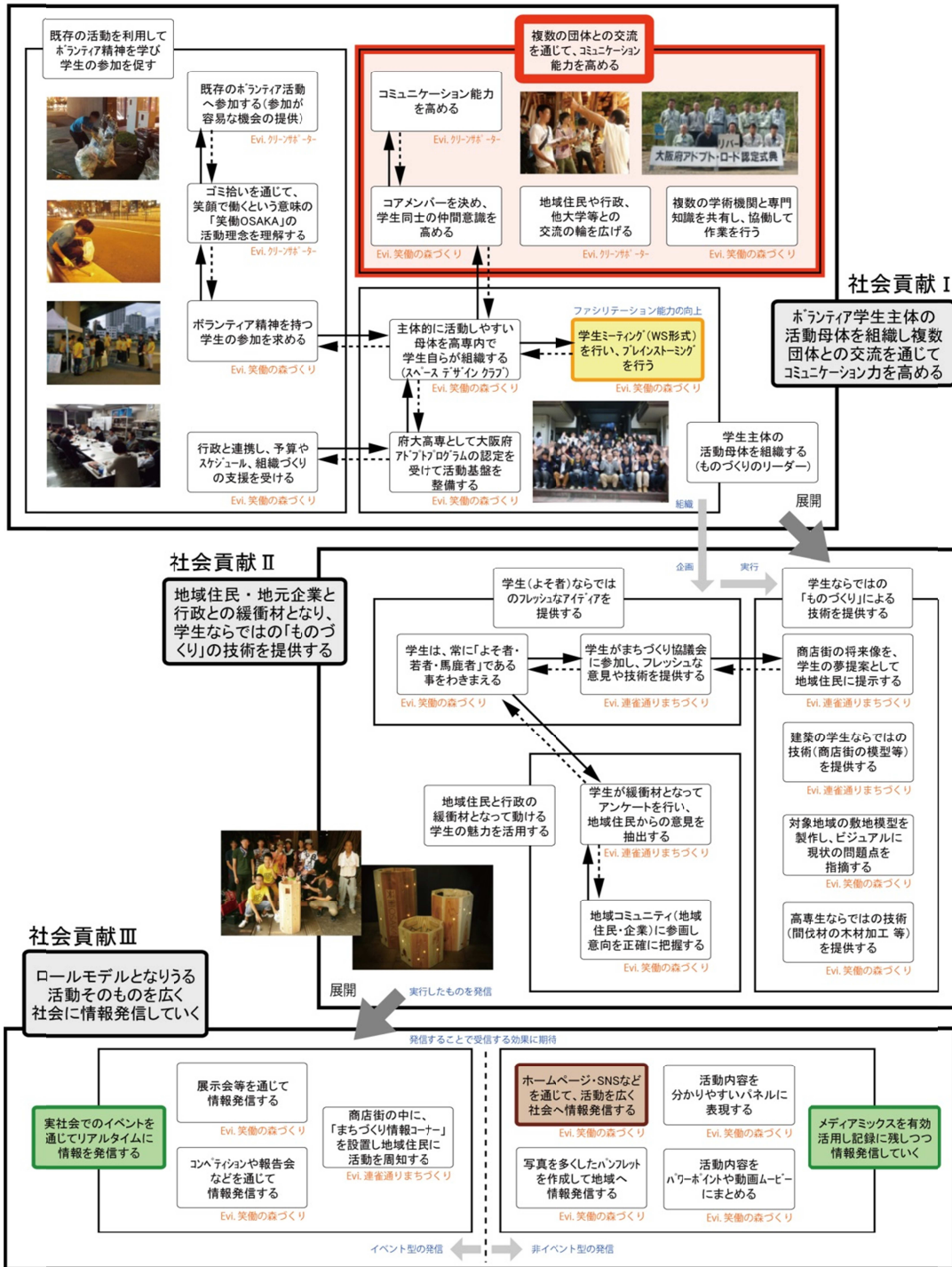


図4 社会貢献の理念とそれを実現するための方略

町村が支援し、三者が協力して地域に愛されるきれいな道路環境づくりや地域の環境美化に取り組むことを目的としている。府大高専は、和泉市槇尾山の入山口から青少年センターまでの区間における道路（ロード）と河川（リバー）の環境美化に取り組む「アドプト・ロード・槇尾山」「アドプロ・リバー・槇尾山」の認定^[37]を受けている。

(2) 指導学生の活躍

国立高専機構による「全国高等専門学校デザインコンペティション 2013」において、指導学生 2 名が環境部門で全国 2 位となる優秀賞（作品名：ボードウォーク、2013 年 11 月）を受賞^[38]している。当該コンペティションは過疎化の進む鳥取県米子市の皆生温泉街を活性化させるためのアイデアを募集するもので、1 次審査のパネル提案に加え、2 次審査はワークショップに基づくプレゼンテーションが求められるスタイルであった。その際、授業で取り組んでいるブレインストーミングと KJ 法の技術が活かされ、指導学生の受賞につながった。

また、土木学会 100 周年記念事業として行われた「市民普請大賞（2014 年 9 月）」で笑働の森づくり活動を取り上げ、私が顧問をしている Space Design Club の指導学生 2 名他が入選^[39]を果たしている。市民普請とは、市民が主導的な役割を果たしながら、地域を豊かにするために実践する公共のための取り組みのことである。これに関連し、さらに大阪府鳳土木事務所から指導学生 7 名に「奨励賞」が授与された。

(3) 校長顕彰

私自身に関する公的な評価としては、府大高専の校長顕彰^[40]（実施要領第二条第(2)項「笑働の森づくりにおける取組み」、実施要領第二条第(6)項「全国高等専門学校デザインコンペティションにおける取組み」2014 年 3 月）の表彰が挙げられる。

5. 複数の活動との関連と統合

図 1～図 4 より、複数の活動との関連と統合を試みる。

5-1. 複数の活動との関連

(1) 教育活動⇔学術研究：分かりやすい表現

図 1・図 2 の紫色ラベル：私は学術研究において、得られた知見を分かりやすく伝えるために CG パース等でシミュレーションするよう心掛けているが、教育活動においても同様に分かりやすさを重視している。例えば、イメージを理解させるために行っている建築スケッチ方式の講義ノート等は、ビジュアルな分かりやすさを求めてのことである。物事を分かりやすく表現することは自分のためにも相手のためにも重要であると考えている。

(2) 教育活動⇔高専校務：安定した生活

図 1・図 3 の青色ラベル：私は学生にとっても教員にとっても、心理的・精神的に安定した生活環境が重要であると考えている。そのために教育活動において研究室やホームルームを居心地良くしつらえたり、高専校務の中に楽しみを見出したりしている。また、教育活動において成績評価の基準を明確にすることや、高専校務において成績シートを分かりやすくし保護者面談で活用すること等は、トラブルを未然に防ぐための工夫でもある。これらはいずれも安定した生活をおくるための心がけと言えよう。

(3) 教育活動⇔社会貢献：技術のプレゼンテーション

図 1・図 4 の緑色ラベル：教育活動や社会貢献の場では、いかに優れた知識や技術を持っていても、それを正確に第三者に伝えることができなければ、理解してもらえないことが多い。そのため、教育活動においてプレゼンテーションの工夫を行ったり、社会貢献において情報発信の工夫を行っていると言える。

(4) 学術研究⇔高専校務：分かりやすい環境

図2・図3の橙色ラベル：私は学術研究のテーマとして、環境の分かりやすさに着目している。従って、高専校務においてもホームルーム教室のしつらえには気を使い、分かりやすい環境になるよう心掛けている。例えば学生に座席表を綺麗に作成させることで、他教員が授業を行う際にも誰がどこに座っているかが一目で分かるよう工夫している。その座席表には、ホームルーム教室内に複数個所ある掲示板の配置も記入させている。これにより、どの情報がどこにあるかといったことも分かるようになっていく。その他、掃除時間以外にもゴミを拾うよう指示しているが、これは広い意味で、環境を綺麗にして分かりやすい状況を作り出すために行っているとも言えよう。

(5) 学術研究⇔社会貢献(⇔教育活動)：ブレインストーミング&KJ法の実践

図2・図4(・図1)の黄色ラベル：学術研究や社会貢献において行っているブレインストーミングとKJ法を教育活動に取り入れたことは、着任当初、一つのチャレンジであった。本科学生には時期尚早で、専攻科学生に対して行うべきかもしれないと考えたこともあったが、結果的に早期から取り組むことが重要であることが分かった。ブレインストーミングもKJ法も手法自体は、適切なレクチャーを受けさえすれば後は慣れれば慣れるほど効果を発揮するものである。とくに、ものづくりを標榜している高専においては、低学年のうちに小集団で議論する手法を身に付けておくことが、専門分野の学習に入った際にプロジェクト等での活用につながる。

(6) 高専校務⇔社会貢献(⇔教育活動)：ネット環境の活用

図3・図4(・図1)の茶色ラベル：高専校務の章でも少し触れているが、私は高専においてインターネット技術は、コミュニケーションの手段としてではなく、情報伝達の手段として用いるほうが良いと考えている。この立場は人により異なると考えているので、あくまで私の場合は、という但し書きが付く。情報伝達のみと割り切って考えた場合には、ホームページや電子メール、LINE、Facebook、Twitter、Moodle等、大いに活用すべきであると考えている。私自身も、複数の活動において情報伝達のみと割り切り、いくつかの手段を活用している。

5-2. 複数の活動の統合

(1) 発想の転換点となるエピソード

私自身のAP作成の目的は、これまでの複数の活動を振り返り、相互の関係性を捉えるとともに、その核(コア)となる要因を省察することにある。そして、そのコアを定めるためには、少し過去の記憶を紐解かなくてはならない。

中でも、複数の活動に大きく関わり、発想の転換点となりうるエピソードを一つ挙げるとするならば、大学時代に所属していた吹奏楽部の演奏風景がある。私自身はアルトサックスを吹いており、部活動の目標は年に一度実施される秋の定期演奏会と、冬のアンサンブル・コンサートにあった。部員は約60名近くおり、定期演奏会ではほぼ全員がステージに上がり演奏を行う。一方、アンサンブル・コンサートは4~5名程度で1団体として集まり演奏を行うものである。定期演奏会が全体的で大多数の演奏により一体感を味わうものであるとすると、アンサンブルは部分的で少人数の演奏により一体感を味わうものと言える。ともに、一体感という意味では共通しているものの、大きく異なるのは「アンサンブルには指揮者がいない」ことであった。アンサンブルの場合には、各々が時には指揮者の役割を果たし合図を出したり、時にはプレーヤーとして演奏に専念することになる。曲の流れに合わせ状況に応じて、その役割をこなしながら協力し合い一つの音楽を奏でていく。いきなり上手く演奏できることは稀で、何度も練習し、失敗を繰り返しながら、ある瞬間にみんなの息が合い、心が一つになり絶妙なハーモニーを奏でることが出来るようになる。その瞬間が楽しくて、アンサンブルを行っていた。これが私の原風景にある。

(2)統合の中心となる核：Ensemble(アンサンブル)

現在の複数の活動においても、同様のことが言える。

まちづくり活動や建築設計等により、人が快適に住まうための都市や建築空間の有りを探求する上では、誰もが状況に応じてリーダーシップを発揮しつつ、直接的なコミュニケーション(交流)を通じて人の「心」を一つにする必要がある。

複数の活動について、そのことに関連している方略に着目しよう。私は、今までの教育活動においては「発言や会話の流れを調整し、協働を促進する能力を養う」方略をとっており、学術研究では「対象者の行動心理を把握する」方略をとっている。高専校務では「直接的なコミュニケーションを重視し魅力的な人間関係を構築する」方略をとっており、社会貢献では「複数団体との交流を通じてコミュニケーション能力を高める」方略をとっている。これらに共通している事は、心を一つにして協力し合い、ものを創りあげていこうとする姿勢である。そしてそれは、音楽の専門用語でいうところのEnsemble(アンサンブル)の姿勢でもある。私の核(コア)は、まさにそれであった。

6. 主たる成果

(1)グループ学習におけるブレインストーミング&KJ法の実践

私にとって、ブレインストーミングとKJ法は一つの武器であり、今までの複数の活動の中でもとくに教育活動、学術研究、社会貢献において有効に活用されてきたものと言える。とくに教育活動では、グループ学習に取り入れ実践することで、ある一定の成果(前述の全国高等専門学校デザインコンペティションにおける学生の表彰)が得られている。現在のところ、高専校務においてこのスキルが活かされていないため、その活用方法を検討することが今後の課題である。

(2)高速道路サービスエリアの環境評価指標の開発

学術研究で得られた知見を広く社会に浸透させていく方法の一つとして、知見を体系化し、評価指標とした上で、他の環境に応用・展開していくことが挙げられる。その意味で、高速道路サービスエリアの環境評価指標を開発できたことは一つの成果と言える。現時点で、その次の段階である評価指標の現実場面への適用に関する研究を行っており、今後も継続して精力的に研究を進めていく予定である。

(3)「笑働の森づくり」を通じた学生の成長

笑働の森づくり活動を通じて、地域コミュニティに参画した学生は現在までに延べ210名に及ぶ。とくに月1回の定期的な活動を超えて、積極的に地元企業や他大学学生との打合せを行う「主要メンバー」として活動している学生も8名おり、そうした学生の成長速度は著しく早かった。教員として、そうした学生の成長を日々感じる事が出来たことは喜びであり、一つの成果であると考えている。

7. 教員としての目標

7-1. 短期目標

(1)高専校務と他の活動との関連強化

私にとって高専校務とは「苦行」であり、だからこそ楽しみを見出しつつ、効率的に行いたいと思っている。そのためには、他の活動との関連を強化する必要がある。例えば、プログラミングが専門の教員とコラボレーションし、楽しんで連携しながら高専校務を効率的に短縮するためのソフトを開発したとする。このことは学術研究にも共通する成果へとつながり、他高専・大学等に普及できるものを開発したのであれば社会貢献にもつながる。それを学生とともに行うことが出来れば教育活動にもつながるだろう。このように、一つの活動を複数の活動と関連付けて思考していくことこそが、重要な視点であると言える。そこで、2015年度からは現在すでに立ち上げている若手教員の自主研究会を発展的に活用する(若手に捉われずにコラボレーションを図る)ことを短期目標として掲げたい。

(2) 学生主体の活動基盤の NPO 法人化

現在、社会活動の理念として掲げている、学生主体のものづくりを行うための活動母体として「Space Design Club」が学生自身により創設されており、私はその顧問をしている。しかしながら、例えば、遠方地への移動交通手段の確保、最新情報と人的交流の機会を得るための講演会の開催等を考えるとき、学内のクラブ団体では活動運営費をまかなうことが困難な状況にある。そこで、2015 年度からはこのクラブ団体を NPO 法人化し、営利を受けるのではなく活動を維持していくための活動運営費を確保するための受け皿として組織することを短期目標として掲げる。

7-2. 長期目標

(1) 相互作用への期待

自身が育成した人材(ファシリテーション能力を有する技術者)とともに、人が快適に住まうための都市や建築空間に関する共同研究を実施することが挙げられる。従って、本年度末で卒業生が 53 名(研究室ゼミ生、ホームルーム学生の合計)となるため、そのうちの 1 割以上の学生と共同研究等での関係構築を長期目標として掲げたい。私は複数の活動を統合するコアとして「アンサンブル」を掲げているが、ファシリテーション能力を有する者同士の相互作用はより強い効果を発揮できるものと信じている。

(2) 情報の受発信とその継続

潮流を的確に捉え、導かれた知見を広く社会に貢献すべく情報を受発信し、それを継続することが重要である。物事は常に変化する。その時々時代の流れを読むことが求められる。また、情報の受発信は一時的に行うものではなく、継続的に行うことにより活きた情報として社会に貢献できると考えている。従って、常に情報の受発信を行うための研究室ホームページの永続的な更新を長期目標として掲げたい。

おわりに

今回私がまとめた AP は、時間軸でいえば 2014 年度時点で切り取った一断面に過ぎない。時間が経過すれば活動の内容も異なり、方略も大きく変化する可能性が高い。AP の統合で導かれた「アンサンブル」という方略の核(コア)は基本的に変わらないと思われるが、方略の組み合わせが異なれば、アンサンブルというコアが奏でる「音色(種類)」は異なるかもしれない。もし、次回 AP の更新という機会があれば、より具体的な音色を探ってみたい気もする。最後に、本 AP をまとめるにあたって伴奏していただいたメンターの東田先生、スーパーバイザーの山川先生、栗田先生には、多くの気づきを与えて頂いた。ここに感謝の意を表す。

2014 年 12 月 27 日
鯨坂誠之

エビデンス(添付資料)

- [1]. 大阪府立大学工業高等専門学校教育理念, 2014
- [2]. 大阪府立大学工業高等専門学校の都市環境コースのシラバス, 2012-2014
- [3]. 川喜田二郎:「発想法—創造性開発のために」, 中公新書(136), 1967
- [4]. 鯨坂研究室の改修前・改修後のレイアウト (写真事例)
- [5]. 赤木徹也・鯨坂誠之:「わが国における認知症高齢者の住環境に関する書誌学的研究: 研究知見に基づく環境アセスメントと環境デザインへの示唆」, 日本認知症ケア学会誌 12(2), 340-353, 2013
- [6]. 建築スケッチ方式の講義ノート
- [7]. 通常方式の講義ノート
- [8]. 穴埋め方式の講義ノート
- [9]. 作品掲示用コルクボード (写真事例)
- [10]. 作品ネームラベル (写真事例)
- [11]. 大阪ガスショールーム見学会 (写真事例)
- [12]. プレゼンテーション風景 (写真事例)
- [13]. グループ学習風景 (写真事例)
- [14]. 公開授業アンケートシート (5段階評価版)
- [15]. 新任自主研究会議事録
- [16]. ティーチングポートフォリオ・メンター記録 (3名分)
- [17]. 舟橋國男: WAYFINDING を中心とする建築・都市空間の環境行動論的研究, 学位論文 (大阪大学), 1990
- [18]. 鯨坂誠之: 研究業績一覧, 2014
- [19]. Nac 社 EMR-8b 型アイマークレコーダー・取扱説明書
- [20]. 大阪府立大学工業高等専門学校の校務分掌, 2012-2014
- [21]. 大阪府立大学工業高等専門学校の都市環境コースのインターンシップ・進路, 2012-2014
- [22]. 時間割編成ソフト (和田 健)
- [23]. 大阪府立大学工業高等専門学校の学校要覧/簡易版サンプル
- [24]. 高専祭の風景 (写真事例)
- [25]. 高専オリンピックの風景 (写真事例)
- [26]. 教職員バンドのチラシ
- [27]. 寄せ書き
- [28]. 各種業務の委託契約書
- [29]. 笑働 OSAKA のパンフレット
- [30]. 笑働 OSAKA のクリーンサポーター (写真事例)
- [31]. 笑働の森づくり (写真事例)
- [32]. 連雀通りまちづくり協議会 (写真事例)
- [33]. 日建学院・アカデミック講座のチラシ
- [34]. ニッケン・キャリア・ステーションのガイダンス (写真事例)
- [35]. 工学院大学建築学部同窓会・同窓会誌 NICHE
- [36]. Space Design Club のクラブ規約
- [37]. 大阪府アドプト認定プログラム(アドプトロード榎尾山、アドプトリバー榎尾川)の認定証
- [38]. 指導学生の表彰① (全国高専デザインコンペティション 2013, 優秀賞)
- [39]. 指導学生の表彰② (土木学会, 市民普請大賞 2014, 入選)
- [40]. 校長顕彰